

日本旧石器学会

ニュースレター 第40号

NEWS LETTER No. 40

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



アジア旧石器協会第9回大会参加記

—My Sentimental Journey in the Altai—

加藤真二（奈良文化財研究所）

2018年7月29日から8月8日にロシアを訪問し、同国アルタイ地方に所在するロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌学研究所（IAET SB RAS）のデニソワ洞窟フィールドリサーチセンターを会場に開催されたアジア旧石器協会第9回大会に参加した。旧石器考古学的に有用なことを書くのは、加藤には手が余るので、ここでは、とりとめもない感想や個人的な想いを書かせてもらう。

日本からは、日本旧石器学会を通じてエントリーした佐藤宏之、麻柄一志、西秋良宏、出穂雅実、佐野勝宏の各氏と加藤のほか、旧ソ連圏の旧石器研究者と長年にわたり交流している関谷学氏が参加した（このほか、韓国から大谷薫さんが参加した）。

7月29日、前日に成田方面を襲った台風12号一過の晴天の中、早朝、成田空港に集合、シベリア航空(S7)576便にて、アルタイ地方への玄関口でもあるシベリア最大の都市ノヴォシビルスクに向かう。直行便で新しい飛行機でもあったので約7時間のフライトも苦にならなかった。到着後、車でIAETがある学研都市アカデムゴロドクに向かう。この都市は、加藤が大学時代を過ごした筑波研究学園都市のモデルになったとされ、森林の中に街があるようなとても美しいところだった。

7月31日午前9時15分、アカデムゴロドクのホテルを出発、アルタイの大会会場に車で向かう。9時間の長旅だ。30数年前、アルタイを訪れた恩師・加藤晋平先生からは、軍用車を改良した車両でなければ行けないところだと聞かされていたので、とても心配だったが、少々座席がきついことを除けば、道も整備され、昼食もこ

ざれいなドライブインでとれるなど、先生達の苦労など、つゆほども感じず、車窓から見えるソバやヒマワリの広大な畑を楽しむ余裕すらあった。夕方、車は、アヌイ川沿いの渓谷に入り、いよいよ、アルタイの旧石器遺跡の聖地に来たかと思うと、まもなく、デニソワ洞窟フィールドリサーチセンターに到着。これまた、個室2部屋に共用のシャワー・トイレが完備したコテージ、食堂、講堂などが並ぶ、快適な調査基地だった。

8月1日から4日が、アジア旧石器協会第9回大会。大会中は、毎日朝食後、10時からコーヒープレイクを挟んで13時頃まで研究報告、昼食後、近隣の旧石器遺跡へのエクスカージョン・出土品の観察という日程だった。

参加者は、先にあげた日本のほか、ホスト国のロシア、APA構成国の韓国、中国（含む香港）からの研究者に加え、イギリスのRobin DENNEL、イスラエルのOfer MARDER、Gonen SHARONだった。研究



アジア旧石器協会第9回大会参加者
2018年8月4日 デニソワ洞窟フィールドリサーチセンターにて。

報告は、それら各国の研究者が行なっている調査の最新成果が中心となっており、地域的には、APA構成国内に加え、モンゴル、ウズベキスタン、キルギスタン、タジキスタン、イスラエル、ネパール、年代的には210万年前から新石器時代までと多岐に及んでいた。とはいえ、開催されたのがアルタイだったこともあり、世界の旧石器研究者が注目している、中期旧石器時代から後期旧石器時代前半のものが多かった。帰国後にネイチャーに掲載された、母親がネアンデルタール人で、父親がデニソワ人だった少女"デニソワ11"、アルタイで調査中のチャギルスカヤ洞窟（Chagyrskaya Cave）の成果、中国内蒙古東部の林西三龍洞（Sanlongdong, Three dragon Cave）で発見された約5万年前のムステリアン石器群、最下層の23層（ $>122 \pm 18$ osl ka）からムステリアンと"細石刃"がともなって出土したウズベキスタンのクブルック（Kulbulak）など、ホカホカと湯気が上がっているような最新のデータも多く示された。これもAPA大会の醍醐味とっていいだろう。

大会の午後に見学した遺跡は、会場に近いクラマ（Karama）、デニソワ洞窟（Denisova Cave）、ウスチカラコル（Ust-Karakol）、アヌイ2（Anui-2）、同3のほか、車で2時間程度のところに所在するオクラドニコフ記念洞窟（Okladnikov Cave）だった。実は、個人的には、今回の大会に参加した最も大きな動機が、この遺跡見学にあった。というのは、先にも記したように、学生時代、加藤晋平先生から何度もアルタイの遺跡と石器群について、話を聞き、スライドを見せていただいたことから、ぜひ見に行きたいと思いつつも、機会に恵まれず、30年来、心にあり続けた特別な場所だったからだ。そんなこともあり、岩壁に開口するオクラドニコフ記念洞窟を見た時には、「加藤先生、30年かかって、やっと来ました」と、少々センチな気分になったりした。また、のちに訪問したチャギルスカヤ洞窟とともに、デニソワ洞窟では、IAETによる発掘調査が進められており、まさに、世界の旧石器研究の最前線に立っていると実感すること

ができた。

8月2日には、クラマ、デニソワ、ウスチカラコル、カラボム（Kara-Bom）の石器群を観察した。いわゆるカラボム伝統とウスチカラコル伝統の違いを看取することができた。また、細石刃石核の起源とみなされることもあるウスチカラコルの"細石核"多数を観察でき、同様な資料がデニソワ9層にあることも確認できた。

8月5日、大会で成果報告もされたチャグルスカヤ洞窟への1泊2日の会后エクスカッションに出発（というよりも、会場が遠隔地だったので、途中で単独で帰ることができない！）。チャギルスカヤ洞窟は、デニソワ洞窟フィールドリサーチセンターから車で6時間。まずは、宿泊する遺跡近くのキャンプ場に到着し、そこから、車を乗り換えて遺跡に向かう。ネアンデルタール人の化石の出土でも知られるこの洞窟遺跡は他のムステリアンの洞窟遺跡同様、岩山の岩壁に開口している。IAETのベースキャンプが下を流れる川岸にあり、ボートで渡河してから、崖につけられた仮設の階段を上って洞窟開口部に到着する。

ここでは、シベリヤチャーハ伝統とされるチャギルスカヤ洞窟、オクラドニコフ記念洞窟、ストラシュナヤ洞窟（Strashnaya Cave）の出土品やアヌイ3の両面調整尖頭器を観察することができた。全体として、ムステリアンの様相を強く看取できるとともに、カイルメッサー、両面調整尖頭器、小型の両面調整石器など、東ヨーロッパのミコク文化にみられる器種の存在に注目させるような資料が集められており、IAETの意図を理解することができた。



デニソワ洞窟発掘調査状況
廃土は洞外に運び出され、水篩される。



チャギルスカヤ洞窟（左上）
ボートで川を渡ります。

見学後にもどったキャンプ場では、今回の旅では初めて蚊の大群に襲われる。翌6日早朝は8月とは思えないほど気温が下がり、寒さで目が覚めた。午前中、一足先に帰る、中国からの高星、王社江、張双権、陳勝前、李鋒の各氏、それに香港の鄧聰さん一家を見送った後、再び、IAETのベースキャンプにもどり、調査についてのレクチャーを受ける。ロシアばかりでなく世界各地から研究者が発掘に参加している点や地質学・堆積学と廃土の水篩を組み合わせた精緻な発掘方法とその成果がとても印象的だった。特に後者は、よく見知っている某所の発掘に絶望感さえ抱かせるものだった。午後、いよいよアルタイを離れる。今度は、アカデムゴルドムまで車で9時間。夜10時頃、ホテルにチェックイン。さすがにへとへとで、冷水のシャワーを浴びて寝る。

8月7日、ロシアでの最終日。IAETのEvgeny RYBINさんらの研究室などで、カラボム、カザフスタンのウシブラク1 (Ushbulak-1) などIUPの資料を観察したほか、ザバイカルのウスチキャフタ (Ust-Kyahta) の細石刃石器群もおもいがけず観察できた。IUPの大型石刃の接合資料はとても興味深かった。その後、IAET附属博物館を見学した。午後少々早めにノボシビルスクの空港に向かう。帰りは、真夜中発のシベリア航空 (S7) 873便。予定では、北京首都空港に8日早朝につき、そこから羽田行きの日航便 (JL-020) に乗り継ぎ、同日夕方には帰寧できるはずだった。しかし、S7-873便が故障かななかで出発が大幅に遅れ、JL-020便に間に合わなかった。なんとか、北京で夕方のJL-022便を手配してもらったが、台風13号が関東を襲うという。北京からの中国系航空会社の羽田行きの便は軒並みキャンセル。あとはよく覚えていない。ひどく揺れて21時過ぎに羽田空港に着陸。新幹線には間に合わない。残部屋がほとんどない中、蒲田のホテルをなんとか押さえて、部屋に入った時には、ともかくホッ

とした。やはり直行便ですね。

翌9日、新幹線の始発に乗ってそのまま出勤した。

最後の最後でドタバタがあったが、世界の旧石器研究の最前線の地で、実に充実した日々を快適に送れ、そこで学べたことは、今も大いに役立っている。Anatoly P. DEREVYANKO, Mikhail V. SHUNKOV, Andrey I. KRIVOSHAPKINをはじめとするIAET SB RASの各位、様々な連絡調整をおこなっていただいた佐野勝宏氏に衷心より感謝いたします。

最後に一言。今回も日本を除く各国から若い研究者が参加していた。このAPA大会、若い院生クラスの研究者が国際会議デビューするのにちょうどいいものだと思うし、今回もそうであったように、きっと何かしらのものを得ることができる。次回は中国。是非、多くの若手研究者に参加してもらいたいものだ。

2017年度日本旧石器学会賞 受賞者報告

ニュースレター39号で報告しましたとおり、2017年度日本旧石器学会賞を御堂島正会員（大正大学）、奨励賞を芝康次郎（奈良文化財研究所）、橋詰潤会員（新潟県立歴史博物館）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」、および「受賞者の言葉」を報告いたします。

2017年度学会賞

御堂島正会員（大正大学）

選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は御堂島正会員を2017年度の学会賞受賞候補者として選考した。御堂島正氏は、1980年代より日本における使用痕研究を牽引し、理論面の整備の上で使用痕光沢面を中心とした使用痕跡に



御堂島会員授賞風景

ついでの実験研究と出土石器への応用研究を相互に重ねその実証性を高めてきた。その結果は『石器使用痕の研究』（2005年、同成社）に結実している。またその後の研究においては、使用痕だけでなく製作痕跡・着柄痕跡・運搬痕跡・廃棄後の影響などの痕跡分析を進め、実験痕跡研究、石器のライフヒストリー研究へと発展させた。近年の『旧石器研究』誌において数多く発表され、着柄痕跡の実験研究、使用痕跡における非文化的化学・物理的表面変化の実験研究を進めるなど、その広がりには止まるところを知らない。また、勤務する大正大学において熱心に後進の育成に当たっている。以上の業績は学会賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健）

受賞の言葉（御堂島正）

この度は、栄誉ある日本旧石器学会賞を授与いただき、大変光栄なことと感謝しております。

大学院生の頃、旧石器時代や縄文時代の生活を生き活きと描き出したいという思いから、まずは石器の機能を知りたい、そのためには使用痕跡から推定する方法を習得し黒曜岩製石器の分析法を確立する必要があると考え、実験使用痕跡研究を始めることになりました。行政に席を置きながらでしたので、その後の歩みは遅いものでしたが、実験研究を進め、一応遺物に適用できるところまで至りました。

その頃、顕微鏡での観察の際、使用痕跡を分かりにくくする様々な痕跡の存在に苦慮していました。しかし、それらは使用に関する推定のためにはノイズですが、何らかの重要な情報を携えているものではないかと次第に考えるようになりました。石器には使用痕跡のほか、製作、着柄・保持、廃棄、埋没後、回収など様々な要因による痕跡が残されているはずで、そういった痕跡を適切に観察し、解釈することができれば、石器のライフヒストリーに関する新たな情報が得られるのではないかと考えました。そのような考えから、近年は石器のライフヒストリーの推定に向けて、様々な痕跡の形成要因に関する実験痕跡研究を行ってきました。

このように基礎的研究ばかりを長く続けてきましたので、私自身の研究において、肝心の遺物の分析はまだ多くはありません。この度は、このような基礎的研究に対して光を当てていただいたもので、大変勇気づけられたところです。

今回の受賞を機に、痕跡研究に関する理解と関心がより一層進み、若い世代の研究者がさらに増加して研究の推進が図られることを願って受賞の言葉としたいと思います。ありがとうございました。

2017年度奨励賞

奨励賞は、研究者の育成と研究の奨励を目的として、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に優れた業績を発表した会員に授与する。会誌「旧石器研究」他に論文等が掲載された研究者を中心に選考した。芝康次郎会員（奈良文化財研究所）

選考理由

芝氏は九州地域の細石刃石器群を主な研究対象とし、石材産地と消費地の関係について技術形態の検討を加味しつつ研究を進めてきた。「九州の細石刃期における集団の行動パターンとその領域」（旧石器研究第4号）では九州細石刃期の石器石材の利用から集団の行動パターンとその領域に関する検討を行い四つの地域における集団領域を見出し、それを受け「細石刃期における遺跡分布と領域」（旧石器研究第5号）では南九州に限定して小地域単位での石材利用の特性から細かな領域を見出すことに成功した。一方、「九州における後期旧石器時代の遺跡分布とその変化」（旧石器研究第9号）では、データベースの資料操作をもとに南九州における遺跡分布と立地の通時的な変遷を詳らかにした。芝氏は学会シンポジウムで二度報告していることからわかるとおり遺跡と集団領域の研究において欠かせない存在であり、日本列島の集団領域研究に多くの成果を提供してきている。その研究方法の明確性と充実度において、奨励賞の趣旨と合致するものである。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健）

受賞の言葉（芝康次郎）

このたびは、旧石器学会奨励賞という栄誉ある賞を頂戴し、大変光栄に思います。誠にありがとうございました。

現在私は奈良にて職を得ておりますが、旧石器時代研究の軸足は九州に置いています。これは、私が熊本大学在学中に阿蘇南外輪山西麓にある熊本県河原第3遺跡の調査、研究に加わらせていただいたことが、大きく影響しています。私が研究室に入った



芝会員授賞風景

ときにこの調査が始まり、博士課程のときに報告書作成に携わることができました。さらにこれをベースにして修士論文、博士論文を執筆できたことは、僥倖という他ありません。在学中に一貫してご指導賜った小畑弘己先生をはじめとする熊本大学の諸先生方、そして学振研究員時代にお世話になった東北大学の阿子島香先生、柳田俊雄先生には改めて感謝申し上げます。

受賞の対象となりました『旧石器研究』に掲載された論文「九州の細石刃期における集団の行動パターンとその領域」（第4号）、「細石刃期における遺跡分布と領域」（第5号）は、熊本大学大学院に提出した博士学位論文の一部をまとめたものです。2000年代の爆発的な資料増加により、石材利用や細石刃技術の多様性の著しさが鮮明となった九州の細石刃石器群について、石材消費プロセスの分析から行動論的な検討をおこないました。浮かび上がったのは南北九州の顕著な対称性です。両地域の集団は大きく異なる行動戦略を有していたと考えることができます。これらの成果を含めて2011年には『九州における細石刃石器群の研究』（六一書房）として上梓しました。以上の研究成果は、諸先輩方による多くの研究の上に積み重ねた小さな成果に過ぎません。それと同時に、今後の研究課題として、たとえば石材情報など基礎データの不確かさも自覚しております。

こうした現状の打破に少しでも貢献できるように、現在はやはり九州の黒曜石をはじめとした石器石材と人類活動の関わり合いの解明を目論んで、考古学、岩石学、地質学などの多くの研究者の皆さんとともに黒曜石原産地の調査を始めています。九州の多様な石材の基礎データを蓄積することで、移動・居住システム研究の進展が期待できると思っています。この受賞を励みとして、今度も地に足をつけて研究に邁進していく所存です。最後になりましたが、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

橋詰潤会員（新潟県立歴史博物館）

選考理由

橋詰氏は石製刺突具の技術・機能的分析に取り組んできたが、「両面加工尖頭器の欠損について」（旧石器研究第8号）では両面加工尖頭器に見られる割れがどのように刺突か刺突以外の条件によって生じたかを分析した。刺突具の持つ痕跡からその技術的、機能的特徴を見出す研究はまだ少なく、その業績は先進的であると言えよう。また、橋詰氏は毎年のように学会の一般研究発表、ポスター

発表を行ってきた。そのテーマは中部高地、ロシアの調査成果から海外の研究の紹介まで多岐に及ぶ。「環太平洋地域における有茎尖頭器研究において」（第13回予稿集）では、2013年に開催されたPaleoamerican Odysseyの紹介からアメリカ大陸における人類拡散の研究成果を概観した。またニュースレター第35号では、「旧石器時代研究とジオパーク活動」と題してジオパークの取り組みとその旧石器時代研究の果たす役割について紹介した。かように、橋詰氏の本学会に見る研究活動は一つの研究の枠組みに止まることなく多岐に及びその姿勢は評価を得るものであり、奨励賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健）
受賞の言葉（橋詰潤）

このたびは、日本旧石器学会奨励賞をいただき、大変光栄に思っております。受賞理由の一つとなった論文は、現代人的な行動の側面を表すものとしても注目を集めていた刺突具の機能研究に対して、石器のライフヒストリーの視点から機能の読み取り法について検討したものです。私は早稲田大学在学中に参加させていただいた新潟大学の発掘の際に、新潟県真人原遺跡の調査をご紹介いただき旧石器時代研究のキャリアをスタートいたしました。東京都立大学（その後、首都大学東京）での小野昭先生をはじめとする諸先生方のご指導、諸先輩方や研究室のメンバーとの議論、そして都立大学進学前に経験した前・中期旧石器時代遺跡捏造問題などによって、日本列島の資料を扱う際にもより広い視点の中に位置付けて研究することの大切さを学びました。授賞理由の中で一見まとまりのない私の研究を、多様な研究活動として評価いただきましたが、そのような研究を行ってきた背景にはこうした経緯があります。幸いなことに2010年からの8年間、明治大学黒曜石研究センターで大学院時代から構想してきた様々な研究の実践を進めることができました。今回の奨励賞はこうした8年間を終え、新たに新潟県立



橋詰会員授賞風景

歴史博物館での勤務を開始したタイミングでいただきました。これまでの研究に光を当てていただいたように感じられ家族ともども大変うれしく思ったのと共に、これからの研究に対しても叱咤激励していただいたように感じられ身の引き締まる思いでもあります。学会員の皆様には各年次の大会での発表の際など含めご指導いただくとともに、研究の推進の上でも大変お世話になっており心より感謝しております。今回の受賞を励みとして、これからも少しずつでも研究を進めていきたいと考えております。このたびは、本当にありがとうございました。

2018年度第1回普及講演会報告

2018年11月10日（土）にアキタパークホテルを会場として、「氷河時代を生き抜いた狩猟民—秋田の旧石器時代—」が秋田考古学協会と合同で開催された。プログラムは下記のとおりである。

基調講演

沢田敦（公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）「氷河時代を生き抜いた狩猟民—後期旧石器時代の東北日本—」

各論①

石川恵美子（公益財団法人 平野政吉美術財団）「米ヶ森遺跡～秋田県における旧石器研究の幕開けと今日的課題～」

各論②

赤星純平（秋田県埋蔵文化財センター）「旧石器時代の石斧」

各論③

神田和彦（秋田市文化振興課）「地蔵田遺跡～ハンターたちの活動痕跡を追う～」

当日は一般市民60名の参加があり、会場は満席となった。テーマが秋田県ではなじみ深いとは言えない旧石器時代であり、参加者が集まらないのではないかと危惧していたが、結果は例年の秋田考古学協会研究会の約1.5倍の参加者数で、企画側の予想を上回る市民の関心の高さが印象的であった。

沢田会員からは、人類の誕生から旧石器時代の人々の暮らし、東北日本ではどんな石器があり、どのように使われたと考えられるのかなど、基本的なことから最新の研究成果までをわかりやすく講演していただいた。旧石器時代について全く知らない方でも理解できるよう工夫された内容で、具体的な研究を交えた話もあり、基調講演にふさわしいものであった。

続く各論では、3人の地元研究者が秋田県内の旧



満員となった会場の様子

石器時代遺跡を紹介するような内容で発表を行った。石川会員は、秋田県で最初の旧石器時代遺跡の調査であり、最も著名な「米ヶ森遺跡」についての発表を行った。赤星氏からは、秋田県下で出土する前半期石器群の石斧の研究についての発表を行った。神田は、地蔵田遺跡の分析結果から、遺跡でどのような活動が行われたかを考察する研究発表を行った。

閉会后、参加者からは「旧石器時代についてよく知らなかったが、今日の講演会で関心をもった」との声が聞けた。秋田県は研究者の間では著名な旧石器時代遺跡が多い割には、一般市民にはなじみがなかったため、こうした普及講演会を秋田の地で企画・開催することができ、大変よかった。今後も機会があれば、地方学会においても、旧石器時代を積極的にテーマとしてとりあげていきたい。

（神田和彦）

2018年度第2回普及講演会・遺跡データベースワークショップ開催案内

2018年度第2回普及講演会ワークショップ、遺跡データベースワークショップについて、2月9日（土）～2月10日（日）に、福岡市博物館で開催いたします。

今回は九州旧石器文化研究会、福岡旧石器文化研究会、島根大学法文学部山陰研究センターの共催として、普及講演会と遺跡データベースワークショップを併せて実施し、タイアップ企画としてニュースレター38号でも紹介された宮崎県ひなたGIS開発者の落合謙次氏をお招きして、ミニセッションを実施します。

遺跡データベースにとどまらず、公開されている様々な地図情報をWEB上で統合し活用していく取組について、情報交換や意見交換を図る機会となります。興味のある方は、是非ご参加ください。

2019年2月9日(土) 13:00~16:00

データベースワークショップ「九州旧石器遺跡
マッピングパーティー」

13:00~13:40 「新たな"日本旧石器時代遺跡データ
ベース"の構築に向けて」

光石 鳴巳(奈良県立橿原考古学研究所・日本旧石器
学会データベース委員長)

13:40~15:40 マッピングパーティー

九州地方の現行データの確認, 入力, 文献情報の
データベース連携, 入力結果の地図化

15:40~16:00 意見交換・まとめ

・詳細は日本旧石器学会HPに開催要項が掲載され
ています。ご確認ください。

・参加希望者は必ず事前申し込みをお願いします。

申込先: jpra-db@futagami.jp 光石宛

締切: 2月3日(日)まで

2019年2月10日(日) 10:00~16:30

1. データベースワークショップミニセッション

10:00~10:30 「新しい『日本列島の旧石器時代
遺跡』データベースが目指すもの」

光石 鳴巳(奈良県立橿原考古学研究所・日本旧石器
学会データベース委員長)

10:30~11:30 「旧石器時代遺跡データベースと
オープンデータ活用の可能性: WEB-GISによる利
用の観点」

落合 謙次(宮崎県庁総合政策部統計調査課)

(休憩)

11:40~12:00 質疑・応答・意見交換

2. 普及講演会「福岡の旧石器文化—福岡平野とそ
の周辺—」

13:00~13:15 「開会あいさつ: 福岡旧石器文化
研究会の活動」

高橋 慎二(福岡旧石器文化研究会代表・宇美町立
歴史民俗資料館)

13:15~14:00 「福岡の旧石器文化—福岡平野と
その周辺—」 杉原 敏之(福岡県教育委員会)

14:00~14:45 「腰岳黒曜石原産地の様相」 芝
康次郎(奈良文化財研究所)

(休憩)

15:00~15:45 「雲仙北麓の遺跡群と黒曜石の消
費」

辻田 直人(雲仙市教育委員会)・川道 寛(長崎
県教育庁新幹線文化財調査事務所)

(休憩)

16:00~16:30 シンポジウム「福岡の旧石器文化
—福岡平野とその周辺—」

2019年度 総会・研究発表・ポスター
セッション発表の募集

2019年6月29・30日に大正大学(東京都豊島
区)にて第17回総会・研究発表・ポスターセッ
ションを開催します。ついては, 一般研究発表及び
ポスター発表を募集いたします。皆様の積極的なエ
ントリーをお願いします。詳細は近日中に日本旧石器
学会HPにて掲示予定です。

また, 同日程にて, シンポジウム「旧石器研究の
理論と方法論の新展開」(仮)を開催しますので,
あわせてご参加くださいますようお願いいたします。

関連学会情報

第44回九州旧石器文化研究会(沖縄大会)

開催報告

第44回九州旧石器文化研究会は「日本列島の人
類起源をめぐる南方ルート-沖縄の旧石器人と文化
を考える-」をテーマに, 平成30年12月8日(土)・9
日(日)の2日間にわたり開催された。

1日目は, 沖縄県立博物館・美術館で研究発表が
行われ, 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査の
成果や石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査成果
について報告がなされ, また沖縄県内で出土する人
骨について人類学的観点から研究発表が行われた。

研究発表では, 沖縄本島における調査成果の報告
に加え, 薩南諸島や台湾の旧石器文化についても発
表が行われ, 台湾から南西諸島にかけての旧石器時
代の人類活動について検討が行われた。

2日目は, 遺跡現地見学や資料見学を中心とし,
1日目の夕刻に沖縄県立博物館・美術館で行われた
サキタリ洞遺跡出土品の展示解説を含め, 沖縄本島
特有の遺跡立地や遺物出土状況, 出土品について,
遺跡立地や資料の見学を行った。



研究発表会の様子

80名に近い参加者があり, 会場は満員となった



現地見学（石垣島白保竿根田原洞穴遺跡）の様子
小雨交じりの中、空港敷地内で遺跡立地や調査状況を見学

1日目午前には石垣島白保竿根田原洞穴遺跡の現地見学も実施された。遺跡は新石垣空港敷地内の立入制限区域内にあり、現地の地形や地質環境を踏まえて遺跡立地や調査状況に触れることができたことは特に有意義であった。

テーマとした沖縄と台湾、九州をめぐる南方ルートの現状については、全体としては依然資料数が少なく課題も多い。しかしこれまで具体的な物証が乏しかった琉球列島の旧石器時代遺跡について近年の発掘調査により新たな資料や知見が得られ、その地域的な特徴が見えてきた点は極めて意義深い。現地ではこれらの遺跡の調査研究と保護の取組が続けられており、現地でその成果や活動に触れることができたことは、今後の保護や研究の方向性を考える上でも良い機会となった。（馬籠亮道）

お知らせ

日本旧石器学会研究グループの募集

本学会では、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。その「日本旧石器学会研究グループ規定」には自由に研究を行うことができる上、運営費を補助することも盛り込まれております。

つきましては2019年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2019年3月31日まで。応募・問い合わせ先は、事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

メーリングリストの運用について

メーリングリストの運用を行っています。これは

学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolith.jp）までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいています。会費未納の方につきましては会費納入状況を同封いたしましたので、未納金額を御確認いただき、速やかな納入をお願いいたします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。既刊ニューズレター等でお知らせしたとおり、2018年度より年会費が6,000円になっております。会員各位の御理解をよろしく願います。

また、転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニューズレター 第40号

2018年12月28日発行

編集: 日本旧石器学会ニューズレター委員会

橋詰 潤・馬籠亮道・山崎真治

発行: 日本旧石器学会

事務局: 〒192-0364

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部

人文・社会系 歴史・考古学分野

E-mail jimu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>